東京帝國大學圖書館

河上徹太郎全集

第六巻

勁草書房刊

河上徹太郎全集　第六巻

昭和四十六年五月二十日第一刷発行

定価二八〇〇円

著者　河上徹太郎

発行者　井村寿二

印刷者　白井倉之助

印刷所　精興社

製本所　牧製本

発行所　勁草書房

東京都千代田区神田駿河台二ノ三
電話東京(二九四)六一二一
振替東京一七五二五三

© T. Kawakami Printed in Japan

(落丁・乱丁本はお取替えいたします)

0390—831600—1836

河上徹太郎全集　第六卷

編纂委員

石川　淳

井伏鱒二

小林秀雄

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

目次

吉田松陰

序……13
僧默霖との出會ひ(一)……19
僧默霖との出會ひ(二)……26
スティヴンスンの松陰……33
「講孟餘話」(一)……40
「講孟餘話」(二)……47
「講孟餘話」(三)……52
「講孟餘話」(四)……59
松陰の國際認識……66
左内と松陰(一)……73
左内と松陰(二)……79
左内と松陰(三)……89
佐久間象山のこと(一)……98
佐久間象山のこと(二)……105

佐久間象山のこと(三)……111
山鹿素行の士道(一)……118
山鹿素行の士道(二)……125
李卓吾への傾倒……132
殉死といふこと……140
あとがき……148

讀書論

讀書のすゝめ……153
横光利一「薔薇」……155
室生犀星「つくしこひしの歌」其他……158
結婚のモラルに關する二小說……165
岸田國士「暖流」……169
川端康成「雪國」……171
岡本かの子「老妓抄」「五月となれば」……173
里見弴「文學」「求心力」……177
三好達治「春の岬」……179
梶井基次郎「城のある町にて」……182

井伏鱒二「禁札」「多甚古村」……184
明石海人「白描抄」……187
通俗小說の社會性……188
正宗白鳥「變る世の中」……193
岩野泡鳴「發展」以下五部作……194
島木健作「運命の人」……195
小林秀雄「ドストエフスキーの生活」「文學2」「モツアルト」……197
佐藤信衛「文化のため」「わが用心」……203
保田與重郎の歷史主義的文藝評論……206
自由主義沒落の二著……209
龜井勝一郎「陛下に捧ぐる書簡」……214
原口統三「二十歲のエチュード」……215
吉滿義彥「哲學者の神」……216
中村光夫「作家と作品」……217
福田恆存「作家の態度」……219
愛の虛實について……220
モンテルラン「若き娘たち」……224

アナトール・フランスの短篇……227
シュニツラア「女の一生」……228
文學賞の作品について……230
ルナアル「博物誌」……232
ロオレンス「チャタレイ夫人の戀人」……233
「ヴエルレエヌ詩集」鈴木信太郎譯……237
デカルト「方法敍說」……239
ヴァレリイ「精神の政治學」「ヴァリエテII」……241
ヴァレリイ其他「精神の將來」……242
ルイ・レイノオ「現代文學の危機」……244
ジイド「藝術論」「新日記抄」……247
モーロア「英國史」……249
シモンズ「象徵主義の文學」……250
ストレーチー「ナイティンゲール評傳」……252
シュワイツエル「わが生活と思想より」……253
モース「日本その日その日」……255
ティンダル「科學と空想」……257

作品論

プルウスト「スワン家の方」……263
邦譯メリメ全集……264
森有正「ドストエーフスキー覚書」……268
秋聲の「縮圖」……269
島木健作「或る作家の手記」……271
永井龍男「朝霧」……274
石川達三「生きてゐる兵隊」……277
阿部知二「黒い影」「おぼろ夜」……278
林房雄「文明開化」……281
小林秀雄・岡潔「對話人間の建設」……282
三つの良識の書……283

＊

大岡昇平「俘虜記」……287
中原中也全集第二巻解説……287
舟橋聖一「芸者小夏」「裾野」……289
中山義秀「露命・月魄」……290

武田泰淳「森と湖のまつり」……292
「組織」の時代の批評—江藤淳「奴隷の思想を排す」について—……293
三島由紀夫「宴のあと」……297
大岡昇平「花影」……299
井上靖と「淀どの日記」……300
島尾敏雄「島へ」……301
椎名麟三「媒酌人」……302
私と性文学—大江健三郎氏の「性的人間」に触れて……303
福原麟太郎『チャールズ・ラム伝』……305
舟橋聖一「ある女の遠景」……306
正宗白鳥全集第九巻解説……306
正宗白鳥全集第六巻解説……309
石川淳「至福千年」……311
正宗白鳥全集第七巻解説……312

文学時評

批評への不信……317
毛沢東の詩　ほか……325

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

実名小説論—「かの子撩乱」ほか— …… 332
パリの憂鬱 …… 337
物故した谷崎と梅崎 …… 341
文学賞作品その他—「一個その他」ほか— …… 349
転んだ神父たち—遠藤周作「沈黙」をめぐって— …… 354
宇野千代の世界 …… 360
ヴァレリーと精神の危機 …… 366
三好達治の厳しさ …… 373
萩原朔太郎 …… 380

人と文学

石川淳 …… 391
井伏鱒二 …… 406
武者小路実篤 …… 421

「文學界」後記

昭和十一年 …… 433
昭和十二年 …… 435
昭和十三年 …… 443

昭和十四年……453
昭和十五年……461
昭和十六年……472
昭和十七年……481
昭和十八年……491
解説……山本健吉……495
解題……大平和登……500

吉田松陰

——武と儒による人間像——

序

この題目はここ數年間考へて來たものである。もう準備が出來た譯ではないが、私のやうに淺學の怠け者にはいつまでたつても考へが熟すといふことはあり得ない。しかたがない。私は勉强しながら筆を執つてゆく。これは、松陰の評傳でもなければ、幕末の思想史でもない。もつと切實な、思へば日本人の血の中に、少くとも私には、今でも隱れ流れてゐる主導的感情を辿つてゐるやうなもので、私の今日のものの考へ方もここに現れてゐる筈である。從つて體系もなければ筋もなく、書いてゆくうちに矛盾したことや重複したことが出て來るのを、避けるよりも積み重ねていつて、一つの思想の形に近いものが出來ることを願つてゐる。こんな恣意が今日のジャーナリズムに許されるかどうか。編集者と讀者の御叱りを俟つ。

こんなテーマを思ひついたのは、今から十年前、中央公論に「日本のアウトサイダー」を連載した頃からである。この列傳の中でこの機會に新たに魅力を感じた人物は、岡倉天心・內村鑑三・河上肇であつた。彼等はそれぞれの分野に於て近代日本にいはば西歐の傳統を確立することに一生を捧げた。しかもその傳統への誠實さは、それがために同時代のわが文化圈の中でアウトサイダーの立場に立たせ、更にそれがためにオーソドクスの確立を强固なものにしたのである。

この屈折した存在の理論は私に色々興味ある考察をさせた。それは各論的に私のこの著書の內容をなしてゐるのだが、それを大ざつぱに結果から見ると、次のやうな二つの顯著な特徵が指摘出來るのである。

一つはかうである。彼等は三人とも文學者ではない。然し同時代の文學者がなすべき重要な役割を、それぞれの分野に於て果してゐるのである。これも大まかな理論だが、當時のわが文學界は、英獨のロマンチシズムか佛露のリアリズムに觸發された個人主義文學であつた。それは自我の擴張や「家」から社會への解放を行ひ、それなりに時代的意義を帶びてゐる。然しわれわれが近代人として人間的に眼覺めるためには、消極的・間接的な方法論しか持合せてゐない。

彼等三人は皆ともに一代の名文家である。そしてその著作は、外來思想の祖述であるよりは、それに觸發されて時務を語り、自己を語つてゐるのである。それは一種の告白文學であるともいへよう。それによつて、明治の文明開化によるわれわれの精神的ひずみを直し、專ら物的文明の遲れを取り返すために人間性の點でなりふりを構はぬわれわれの姿勢を整へようとした。これは當然文學がやる仕事なのだが、少くとも文壇の主流は積極的にこの課題に取組む意欲がなかつた。これに對し、鑑三の「われは如何にして基督敎徒となりし乎」は、われわれの近代自我の眼覺めを高唱した告白文學であり、肇の「獄中記」は自然主義系の左翼文學として一流の作品である。天心の「茶

の本」が十九世紀的西歐の汚染と如何に鬪つてゐるか、これは意圖が少し違ふが、明治三十年代のわが文明批評の核心を衝いてゐる。

これらの明治大正の文化的エリートの著作を見てゐると、わが文學の本質的な在り方が舊幕以來のそれと同じものがあるのを感じるのである。卽ち士大夫の人生論は主として儒敎的敎養がこれを受け持ち、文學プロパーの世界は稗史小說の類ひで、西鶴近松に風俗小說的表現に見るべきものがあるも、その末端は情緖官能のたはむれに過ぎないといふ在り方である。私はここで價値の上下を論じてゐるのではない。人生觀の廣さ、つまり全人性の點で、昔も今も文は儒に及ばないといふ實情を指摘したいのである。

その結果、私の擧げたい第二の特徵がある。それはこの三人が揃つて儒敎的敎養で以て人格的に骨格づけられてゐることである。天心は儒敎といふより老莊がかつた傾向があるが、鑑三は儒者ともいひ得る武士を父親に持ち、その嚴格な躾のもとに成人した。彼はこの異敎性をその「初心」の如く身につけて忘れず、晩年に至るまで武士道的クリスチャンを自稱してゐた。河上肇は私がしばしば吉田松陰に擬したくなる人で、事實彼自身松陰に私淑して梅陰と號したこともあり、その志士＝革命家的情熱は武士的ピューリタニズムが主導してゐるのである。

明治以後の人をあまり儒敎的などいふ槪念で律すると、人物論として曖昧になり、かつ先入主に毒される惧れがあるから以後なるべく愼しむが、明治文化の基礎に「士魂」があることは、單にそのつらだましひといつたポーズだけでなく、人間的自己表現の方法論をも支配してゐることを忘れてはならないのである。

だから本書の題目は傍題の方の「武と儒による人間像」といふ一般論である。然しそれでは漠然とし、抽象的であるから「吉田松陰」の名を借りて見出しにした。丁度ヴァレリイが「レオナルド・ダ・ヴィンチ方法論序說」を書いた故智に倣つたものである。松陰は私が今狙つてゐる理念の一番典型的な存在であり、人間的には私とは可なり隔つてゐるが、その人格の美しさにはかねがね惹かれてをり、殊に同鄕人といへる間柄であることは、その點でも私に親しい人物であつて、その名を引き合ひに出すのに氣がおけないものであるのだ。だから、登場人物は以後思ひつくままに色々あるのだが、松陰は本書のライト・モティフであり、論述の途に迷つた時の迷子札のやうに、常に護符として呼びかけさせて貰ふつもりである。

松陰は志士である。文によつて自己表現をする人ではない。然しその精神の純一さはその文章表現の中によく現れてをり、稀代の名文家である。殊に今日幸ひにして數多く遺されてゐる書簡は、殆どそのまま日記として扱へるくらゐその時々の身邊の日常を語つてをり、そのまま自傳文學の一傑作をなしてゐるのである。彼の文才は、靑年時代に自ら文人たらんとする氣を一寸起させるほどのものがあつた。それは嘉永六年に江戸に向ふ途上、大和の森田節齋につき合つた時などにその氣持が窺はれるのである。然し彼は、經國の念が先に立つてといふより、文そのものに窮極の重きをおかなかつたから、この誘惑にうち

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com